

ヌーベル・
アモーレ

朝風美海

恋におちる確率（１％）

この若さで、俳優なんて仕事をしていると、楽しい事が多い半面、色々な雑音も聞こえて来る。

そんなの仕方が無い事とはいえ、時には落ち込む事だってある。

あれは、とあるドラマの制作発表の後だった。

「本当に、人気取りだけで、いいんですか？」

「まあ、旬の素材も必要だろう」

偶然とはいえ、聞いてしまった話は、無い事には出来なかった。

その時、僕だけが、それを聞いていたのでは無かった。

事務所の先輩は、そっと肩に手を掛けると、片手で杯を呑む仕草をした。

その店は、芸能人も一般人も、何も関係ない様子の居酒屋だった。

少しざわめいた店内は、居心地が良く、頼んだ料理も美味しかった。

「日本酒は、そのまま呑んだらダメだぞ。こうして、チェイサーと一緒に飲むと、悪酔いしない」

「チェイサー？」

「水の事」

「なんか、カッコいいですね」

先輩の杯を受けた後、自分もまねをしてお返しに酒をお酌した。

「カケル、自分を信じて、演技で見返してやれよ。おまえならそれが出来る」

僕は、少し照れくさそうに俯いて頷いた。

先輩は、大人でカッコイイと心底思った。

その後も、先輩の口から、こぼれて来る言葉は、まるで詩の様に素晴らしかった。

やはり、この人は、アーティストなんだと実感し、気が付くともう看板の5時前になっていた。

さりげない支払いもスマートで、自分との器の違いを見せつけられた。

まだ、夜明け前の暗い道を、二人で並んで歩きだした。

陸橋の柵の前で、先輩は立ち止った。

「もうすぐ始発が動き出す」

僕も、つられて陸橋の下に目を落とした。

真っ直ぐに伸びた何本ものレールが、これから来る電車を待ちわびているかの様だった。

ふいに先輩に、後ろから抱きしめられた。

体の骨格を確かめる様に、抱きしめると耳元で、先輩が囁くように言った。

「いい骨をしている。カケルなら、大丈夫だ」

ドクリと心臓が、大きく鼓動した。

今まで、細いだの女みたいだのと、散々言われてきたが、自分の核心を突かれたその言葉に、僕は男として認められたと思った。

暫く感じていた先輩の温もりが、離れると急に心細くなった。

「帰るか」

「はい」

わざと、大きな声を出して、歩き始めた先輩の後に続いた。

恋におちる確率（5%）

撮影に入る前に、所作や動きの練習に入る。

その稽古は、過酷と言っても、過言では無く、毎日筋肉痛との戦いでもあった。

慣れない殺陣の練習など、鬼と思うほどしごかれた。

撮影に入る前からこれでは、先が思いやられたが、主役を張る先輩は、何かと気に掛けてくれた。

クランクインの後、盛大なパーティが開かれた。

局の偉い人や、訳の解らない人にまで、気を使ってすっかりばててしまった。

「カケル、ちょっと抜けだそうぜ」

「ええ？先輩が抜けるのは、まずいでしょ？」

「ほんの5分休憩だよ」

会場の非常口の鍵を開けると、螺旋階段の鉄作にもたれた先輩に、僕は冷や冷やした。

「お水、持って来ましょうか？」

「いや、いい」

先輩が、潤んだ瞳で僕を見つめた。

さっきから、かなり呑んでいたもので、流石の先輩も風に当りたかったのかもしれない。

「カケル、キスを教えてやろうか？」

「え？……」

キスしていい？でも、キスしようか？でも無い先輩の言葉に、戸惑った。

僕の沈黙に、先輩は笑いながら言った。

「上手いと女にモテるんだが、ファーストキスなら、俺が奪うものじゃないな」

ポンと肩に手を置くと、僕を非常階段に残したまま、先輩は建物の中に戻って行った。

心臓の鼓動と、やたらに熱い顔の火照りが冷めるまで、僕は風に当たっていた。

恋におちる確率（17%）

一足先に撮影に入っていた方達に、挨拶を済ませると、メイクや着付けをしてもらった。

最初に言われた事は、芝居が終わってもカットを掛けない。10分を超える長廻しも多いので、気をつける事。そして、台本の持ち込みは禁止。

自分の台詞以外、出演者の台詞全てを、頭に入れないといけなかった。

僕は、何回も何回も頭に台詞を、叩き込んだ。

現場に着くと、嫌でも緊張感が揚まった。

周りにいた出演者も、そのあまりの汚れぶりに、訝しげな目を向けて来た。

最初のテスト以降は、もう思い出せない位だった。

深夜にまで及ぶ撮影が終わると、全身から力が抜けそうだった。

「なんだ、カケルか？誰かと思ったよ」

先輩の言葉に、やっと我に返った。

「あ・・・あの・・・僕、大丈夫でしたか？」

何とも間の抜けた言葉が、自分の口をついて出て来た。

「皆の見る目が、変わったぞ。呑みに行こうぜ」

「え？どこに？」

「こっちだ」

セットの延長みたいな戸を開けると、テレビで観た事のある層々たるメンバーが、中で楽しそうに酒を呑んでいた。

「おう、カケル」

「ケン兄貴」

懐かしい顔を見つけて、少しだけ緊張が解けて来た。

「こんなかわいこちゃんが、人斬りだなんて信じられん」

辺りがどっと笑いに包まれた。

「一緒に呑もうぜ」

「はい」

ケン兄貴に近づくと、彼から杯を受け取った。

持ち前の大きい声で、皆の視線を集めたケン兄貴は、僕の肩を抱いて言った。

「人斬り役の新藤カケルを、宜しく！！」

皆が、再び沸いた。

「ほら、挨拶しろよ」

背中に冷や汗をかきながら、僕は挨拶した。

皆で乾杯すると、杯の酒を一息に呑んだ。

どよめきと拍手の中、やっとケン兄貴の隣に腰を下ろした。

杯が乾く間もなく次々とお酌された。

ほぼ、全ての人から受けた酒を、呑み終わると、先輩が水のペットボトルを持って、隣に腰を下ろした。

「飲んどけよ。明日辛いぞ」

「ありがとうございます」

すっかり気持ちが悪くなった僕は、一息に水を飲み干した。

「おまえら、無茶するなよ～」

先輩の優しい声が、水と一緒に心に浸みわたった。

「ケン・・・兄貴？」

気が付くと、ケン兄貴はつぶれて眠りこけていた。

「驚いたか？毎晩こんな感じだよ」

「はい」

「付き合いたく無い時は、無理するなよ」

「はい・・・先輩にもつがせてください」

「うん」

先輩が、杯を差し出すと、ゆっくり酒を注いだ。

「乾杯しよう」

「はい」

二人だけの乾杯が終わると、先輩は僕の髪に指を絡めた。

「しかし、汚くなるんだな。こんなに綺麗なのに・・・」

「綺麗ななんて、やめてください・・・男なんだから」

少し唇を尖らせると、可笑しそうに先輩が笑った。

再び、心臓の鼓動が速くなった。

それは先輩の指が、落とし切れてなかった僕のメイクを、拭ったからだ。

耳の下を、暖かい指で触れられただけなのに、僕は顔を赤くして謝るしか出来なかった。

恋におちる確率（36%）

恋に落ちるスピードは、人それぞれだ。

少なくとも、人より慎重な僕は、恋に対しても臆病だった。

撮影で、先輩の幼馴染という設定で、懐かしそうな眼差しを向ける先輩の真っ直ぐな目に、僕は
その時、それを恋と呼ぶのか解らなかった。

何回かのテストの後、本番で懐かしそうに先輩に抱きつくと、先輩はテストの時とは、まるで違
う抱きしめ方をした。

そう、本当に大切な人を抱きしめるかの様に・・・

長廻しの為、抱き合ったままの姿勢で、表情を変える事は出来なかった。

ただ、心臓だけが早鐘の様に、脈打っていた。

どの位の時間そうしていたのだろう。

モニターチェックが、入りやっとオッケーが出た後、先輩が耳元で心配そうに囁いた。

「もっと、肩の力を抜いた方がいいよ」

「はい・・・すみません」

そう言うのがやっとだった。

「緊張してるね。こんなに震えてる」

「・・・・・・・・」

「大丈夫だから、落ち着いて。カケルならできるから」

今にも泣きそうな僕に、先輩が優しくほほ笑んだ。

心臓が、前よりも激しく脈打った。

「次のシーン行きます。メイク直します」

僕をその場に残して、次の撮影の為、先輩が移動した。

「メイク直しますね」

「はい」

僕は、やっとの思いで立ち上がると、目を閉じた。

暫くは、先輩の撮影を見ていたが、次のセットに移る様に指示された。

細かく坐る位置を直され、先輩と三人の撮影が始まった。

先輩の僕に向けられる柔らかな眼差しが、僕の体温を上昇させる。

きっと、気づいていないだろう。

その唇に、僕が引きつけられている事に。

「カケルさー。良くラッキーに唇許してたよなー」

皆で呑んでいた時に、酔ったケン兄貴が突然言い出した。

「ナニナニ？ラッキーって誰？」

周りが、興味深々で僕の言葉を待っていた。

「なっ！！やめてよケン兄貴！あれは、ふざけてただけだって」

「俺もさーかわいいカケルに、ちゅうして欲しかったなー」

「もう、呑み過ぎだつてば！！」

「今から、させろよ」

「やだよ」

「おまえ、メンクイだもんな」

「もう、オヤジが若いもんに絡むんじゃないの」

さりげなく助け船を出してくれたのは、先輩だった。

「福永さん！！オヤジって・・・俺～！！」

周りがどっと笑った。

「かわいい幼馴染を悪の手から、守らなくちゃいけないからね」

「酷いですよ～俺、悪の手ですか？」

「うんうん、お前は、悪だ」

周りが賛同する。

「カケルは、今は俺のもんだからね」

先輩が、僕の肩に手を回して、ぎゅっと抱きしめた。

自然に顔が赤らむのを感じながら、先輩の体温を感じていた。

恋におちる確率（50%）

撮影が進むにつれて、人斬り役が僕の中に入って来た。

それと同時に、人斬りの重々しい空気感がゆっくりと、僕の周りに纏りついた。

こういう撮影所という所は、何かが住んでいるのかもしれない。

酒を呑んでいても、いつしか皆と馬鹿騒ぎする事も無くなり、気が付くと黙々と一人で杯を重ねていた。

いつもなら、深夜まで及ぶ撮影に入ると、わずかな明き時間でも眠りに落ちていたのに、ピリピリとした神経のせい、眠る事もままならなくなっていた。

「大丈夫か？疲れてるだろ？」

「はい・・・」

先輩の優しい言葉も、今は、煩わしいものでしか無かった。

「おい！！」

突然、太一先生さんが、ガバッと起き上がった。

「はい、太一先生」

「厠へ行くぜよ」

「はい」

もう、すでに役と現実の区別も、曖昧な物になっていた。

太一先生を介助しながら、戻る道すがら抱き締められて、僕は自分がどうするべきか、考えられなかった。

ただ体は、反射的に太一先生を、拒んでいた。

「おまんは、わしに尽くすんが務めじゃ」

「先生・・・」

木塀に押し付けられて、僕は思わず目を瞑ってしまった。

唇が、触れるか触れないかの所で、不覚にも涙がこぼれた。

「すまん」

太一先生は、その雫を指で拭くと、体を離れた。

「呑み過ぎた・・・」

心臓の動悸と乱れた呼吸を整えるまで、僕はその場を動けなかった。

たかが、キス位でこんなに動揺するなんて・・・

「大丈夫か？カケル・・・？」

先輩が心配そうに、近づいて来るのを僕は、手で制した。

「大丈夫です・・・少ししたら戻りますので、休んでください」

「無理するなよ。おまえ、ほとんど寝てないだろ？少し、歩こうか？」

「歩く？」

「ああ」

お堀に沿って、先輩は歩き始めた。

「え？」

僕は、慌ててその後について行った。

月が、とても綺麗な夜だった。

いつもは、喧騒としているセットの中も、今は静粛に包まれていた。

「明日から、過酷な撮影に入るんだっとな」

「はい」

「カケル。俺にとって、人斬りは、かけがえの無い友だと思っている。明日からの撮影は、正直きついんだよな」

「先輩」

「でも、これが終わると、クランクアップだな。寂しくなるな。次も決まってんのか？」

「はい」

お堀端に腰を下ろすと、ふんわりとやさしく先輩が、僕の肩を抱いた。

それは、あまりに自然のなりゆきだった。

そっと、先輩の形の良い唇が、僕に重ねられた。

先輩から伝わる温もりに、僕の頭の中は、真っ白になっていた。

恋におちる確率（59%）

連日の過酷なシーンに、僕は撮影が終了すると、倒れこむ様に眠りこんだ。

体は打ち据えられて、ズキズキと軋んでいた。

悪夢に、悲鳴を上げて飛び起きると、体中寝汗でべとべとだった。

白々と明けかかった窓の外を見て、ようやく自分が生きている事を実感した。

シャワーを浴びながら、もう何日も酒を口にしていな事に気が付いた。

ケン兄貴や若手の俳優さん達は、クランクアップして、すでにここにはいないのを寂しく感じた。

髪を乾かしていると、ドアがロックされた。

「はい」

ガウンのまま出ると、先輩が立っていた。

「外口ケから、戻られたんですか？」

「ああ、土産があるんだ」

「何ですか？ああ、どうぞ」

先輩を部屋に通すと、先輩がビニール袋から、生のうにを取り出した。

「ええっ？？うに？？これ・・・生きてる！！」

「新鮮なのを食わせてやろうと思ってな」

「それで、こんな朝早く？」

「痩せたな。大変らしいな。撮影」

「はい。もう、バシバシ叩かれちゃって、泣けちゃいますよ」

ガウンの前をはだけて見せると、先輩は顔をしかめた。

「確かに痛そうだ。あと少しだ、頑張れよ。おまえの演技評判いいぞ」

「ありがとうございます」

「ほら、食ってみろ。店のと全然違うぞ」

先輩が皿に取り出したうにをおそるおそる口に入れた。

「んまっ」

「だろ～」

口の中でとろけるうには、甘くて初めて食べる別の物の様だった。

「これが、あわびの刺身」

「あわびの刺身？」

わさび醤油を付けて、口に入れるとこりっとした食感に感激した。

「美味しいですね～」

「これで上手い酒でもあれば、いいんだけど。まあ、そのうち呑みに行くか？」

「はい。ぜひ」

先輩は、ニコニコしながらほとんど平らげた僕を見ていた。

「会いたかった」

僕の支度が済むまで待っていた先輩が、ふいに僕を抱きしめた。

「僕も、会いたかったです。痛いし、心細くて・・・」

「すまなかったな。こんな過酷な撮影していたなんて」

「いえ。先輩も外ロケ大変でしたね」

二人の唇が、重なったのは自然な成り行きだった。

初めて重ねた時とは、まるで違う激しくちづけに、僕は戸惑った。

頬に血が昇り、顔が赤らむのを感じた。

「すまん・・・ただ、凄く会いたくて」

「先輩・・・好きです・・・先輩の事」

再び唇を合わせると、部屋がロックされた。

「タイムアウトだな」

「はい」

二人は、軽くキスした後、部屋を出て行った。

恋におちる確率（66%）

「お前、福永に惚れてるだろ？やめとけよ」

太一先生役の森田さんと二人で行った都会のバーで、ざっくりと釘を刺された。

無事にクランクアップを終えて、次の撮影に入る僅かな間に、呑みに誘われた。

「あいつはな、誰に対しても優しくて、気の回る男だ。勘違いするなよ」

「わ・・解ってます。事務所の頼りない後輩を、心配してくれていただけです」

僕は、わざとズキズキと痛む心を押し殺して、グラスを空けた。

「俺なら、おまえの事、凄く大切にすけどな」

「や・・やめて・・くださいよ。大切にするとかしないとか・・・ホントにそんなんじゃないですから」

ゆっくりと、森田さんの手が、僕の顎に掛かると、顔を近づけた。

また、ふいに涙が、零れ落ちたのは、本当に偶然だった。

森田さんの動きが止まった。

「ごめんな。お前の涙には、弱いよ・・・まるで、女優だよ」

顎から外れた手が、頬の雫を拭い取る。

「違うんです。嫌とか・・そうじゃないですけど・・あれ？・・おかしいな・・勝手に涙が・・・」

「マスター、同じのおかわり作ってあげて」

「はい。こちらをどうぞ」

マスターの差し出したハンカチを、顔に押し当てると恥ずかしさのあまり、俯いてしまった。

「おまえは、かわいいな～」

森田さんが、僕の髪をぐしぐしと、かき混ぜた。

一時間かけて、セットした髪は、一瞬にして崩れ去り、今度の役柄の高校生ヘアに戻ってしまった。

「なんだよ。高校生みたいになったな？」

「はあ、今度の役で、こんな髪になったんですよ」

「今度は何？」

それから話は、一気に役作りや、撮影の話へと流れて行った。

「今日は、ご馳走様でした」

「いって。気を付けて帰れよ」

「はい。お先に失礼します」

タクシーに乗り込んだ僕を、森田さんは、手を振って見送ってくれた。

都会の煌めきと喧騒。

ここには、撮影所とはまるで違う世界が、広がっていた。

携帯の着信に気が付いて、出てみると友達が、カラオケで盛り上がってるから、来ないかと誘ってきた。

カラオケ大好きな僕が、断れるはずもなく、運転手に行き先を、変更して貰った。

痛む胸の傷は、心の奥深くにしまいこみ、皆のいるカラオケボックスに乱入した。

恋におちる確率（73%）

次の役作りの為に、僕は、髪をばっさりと切り落としてた。

まるで、先輩への思いを断ち切るかのように……

台本に集中し、同世代との学園物の撮影は、とても楽しかった。

撮影が終われば、皆でご飯してそれぞれのドラマの評価や趣味の話、異性の話など、ほとんどノリは高校生と変わりがなかった。

それでも、ほんの時折心の中に、冷たい風が吹く事があった。

僕は、無理やりそれを封印して、いつもより陽気に振る舞った。

楽しかった撮影も、終盤にさしかかる頃、一本の電話を受け取った。

「元気か？カケル？」

「え？福永さんですか？」

「お前、最終回に人斬りが出なきゃ、話が締まらないと思わないか？」

「はあ……」

「若いんだから、来いよ！」

「はい」

先輩からの電話が切れた後も、携帯を握り締めたまま、動けずにいた。

久しぶりに聞く先輩の声に、逢いたい気持ちが、昂ぶっていた。

「新藤君？」

マネージャーに、たった今かかって来た電話について話をした。

「実は、あちらからも正式にオファーが、来てるんだけど」

「行かせてください。お願いします」

「でも、無理してまた倒れたら、困るよ」

「お願いします。スケジュール調整してください」

僕は、必死になって頼み込んだ。

「事務所と相談して、判断するからね」

「ありがとうございます」

「明日のオフは、ゆっくり休んでね」

「はい。お疲れさまでした」

僕は、ある計画を抱いていた。

恋におちる確率（88%）

早朝の東京駅は、思っていた以上に人が、多かった。

昨晚遅く届いた和菓子を、網棚に乗せると一般車両の指定席に腰を下ろした。

黒ブチの眼鏡と、目深に被った帽子で、一般人に溶け込んだ僕は、窓の外に視線を向けた。

新幹線は、定刻どおりに滑らかに動きだした。

都会のビル群を抜けると、景色は一転してのどかな田園風景に変わっていった。

駅で買ったサンドイッチを、口に放り込み、イチゴ牛乳を飲み込む。

今日の服装にイチゴ牛乳は、どうかと思ったが、好きなものの誘惑には、抗えない。

スーツチェックだって、欠かせないのは、ポリシーなのだ。

あっという間に、全部をお腹に入れた僕は、洗面台でお口のお手入れを済ませ、シートにもたれかかると、とたんに睡魔に襲われた。

帽子を顔に乗せて、暫くまどろんでいた。

窓枠に思い切り頭をぶつけて、目を開けると窓の外に、富士山の雄大な姿が、映し出されていた。

「うわっ！！」

僕は、思わず声を出してしまった。

頭に雪を抱いた姿を、実際に見たのは、数える程しか無かったからだ。

何だか解らないけど、このドラマはヒットする予感がした。

「こんにちは。これ、差し入れです」

「新藤くん、久しぶり！今日はオフ？」

「はい。これ、友達の和菓子屋さんの物で、凄く美味しいんですよ」

「もうすぐお昼だから、皆、戻るわよ。きっと喜ぶわ。甘い物に飢えてるから」

「カケル！！」

「あ、瀬田川さん。お久しぶりです」

「よく来たなあ。なんだあ？一人だけすかした格好して！」

「カケル～！！よく来たな！！」

「福永さん！お電話ありがとうございました。今、スケ・・・！！」

思い切り抱きしめられて、僕の心臓は、破裂しそうだった。

「おい、俺にも抱かせろよ」

瀬田川さんが、先輩を引き離そうとするが、先輩は、僕を離そうとしなかった。

「く・・・くるし・・・！」

「おまえ、ちゃんと食ってるか？また細くなっただろ？」

やっと解放されたと思ったら、両肩をガシッと掴まれて、吸い込まれそうな真っ直ぐな瞳が、僕の目を見つめた。

「美味しいな！カケル～！」

誰かの声に、先輩の手が緩んだ。

「何持ってきてくれたんだ？」

「和菓子です。福永さん、どれがいいですか？」

掴まれた肩が、まだ熱を帯びていた。

ざわざわとした空気の中で、僕の時間だけが、止まっている様だった。

「気を使わせたな」

「いえ」

先輩の手が離れ、また胸の奥底に冷たい風が吹いた。

あれほど良いお天気だったのに、お昼を過ぎた頃から、雨が降り出したのは、僕にとっては、ラッキーだったのかもしれない。

「今日の撮影は、中止です。明日からまた宜しくお願いします」

「カケル、支度するまで待ってろよ。京都案内してやるから」

「はい」

先輩の言葉に、僕の胸は高揚した。

雨の中、先輩は車で、ドラマに縁のある場所を案内してくれた。

「何時に帰るの？」

「まだ、チケット取ってませんが、終電までには戻らないと」

「カケル・・・」

「え？」

優しくキスされて、僕は思わず、自分からその舌に吸いついた。

「好きです。先輩」

熱い思いは、感染する。

信号が変わり、何事も無かった様に、先輩は車を発進させた。

しかし、僕の右手を握りしめた先輩の手も、熱を帯びていた。

帰りの新幹線で、あの後何があったのかは、自分の胸にしまう事にした。

先輩に握られた右手に、そっと触れてみた。

寂しさと、愛おしさと、切なさが、心の中で渦を巻いた。

窓の中に映った僕の顔は、他人からどう見えたんだろう。

一緒に呑んだビールが、僕の頬をほんのり染めていた。

そういえば、キャストの年齢が低いせいか、今度の撮影の後で、こんなに呑んだ事は、なかった。

販売に来たお姉さんから、ビールを二本買うと、一息に飲みこんだ。

窓の外に映る夜景に、目を落としたが、僕はそれを見てはいなかった。

恋におちる確率（94%）

その日、はやる気持ちを押し切れず、僕は新幹線に飛び乗った。

「新藤君、一日位のんびりしたらいいのに」

マネージャーが、口を尖らせた。

「早く現場の空気に慣れておかないと、足を引っ張りたくないです」

「本当に仕事熱心で、感心だよ」

今日は、グリーン車に二人で並んで腰を下ろした。

「はい、お弁当とイチゴ牛乳」

「ありがとうございます」

たわいもない雑談をしながら、あっと言う間に弁当を空にすると、イチゴ牛乳に口を付けた。

100%まで、あと少し・・・頑張れ僕。

心の中でそっと、自分にエールを送った。

「おはようございます」

「おお、カケル！！」

「瀬田川さん！！だめですよ！」

「なんで、福永は良くて、俺はだめなんだよ！！」

するりと、抱きしめようとする瀬田川さんの横を、すりぬけると真っ直ぐ先輩の前に立った。

「よう、カケル。おかえり」

「ただいま」

まるで、新婚さんの様に、先輩に抱きついた。

「なんでだー！！」

背後で、瀬田川さんの悔しがる声が、皆の笑いを誘った。

撮影は先だったが、現場の空気に慣れる為にと、無理にお願いして衣装とメイクを、付けて貰った。

ゆっくりと人斬りが、身の内に満ちて来る。

最初は、道場だったっけ・・・

自然と刀を手に、素振りを始めていた。

撮影終了後の飲み会も、あの時のままだった。

ただこの場には、ケン兄も太一先生も、存在していなかった。

隣に座った先輩が、不意に口を開いた。

「どうだった？可愛い女の子の味は？」

「え？」

「ほら、共演の女の子だよ」

「あ・・・味って！！！」

「なんだ、手を付けなかったのか？へたれだな～」

「お前、女の口説き方知らないのか？」

皆が、女の話で盛り上がった。

「こう、お洒落なバーでさー」

「いやいや、夜景の見える公園で・・・」

「俺は、いきなり連れ込むね」

それぞれが、好き放題言っているのを、僕は頬を赤くしながら聞いていた。

「もしかして・・・まだなのか？」

先輩が、驚いた様に、僕の顔を見つめた。

僕は、思い切り首を振ると、慌てて目を反らせた。

「だよな。カケルは、イケメンだもんな」

「結構たらしだったりして」

「初めてって、どんな娘？」

「やめてくださいよ。それより、先輩方の話が、聞きたいです」

ひとしきり、初体験の話で盛り上がると、撮影で疲れているせいか、少しずつ酔い潰れていた。

やがて、皆はいびきや歯ぎしりを立て始め、起きているのは、先輩と僕の二人だけになっていた。

「おいで、カケル」

先輩が、僕を抱きしめると、熱いくちづけをくれた。

心臓の鼓動が、高まる。

「カケルの心臓の音・・・感じる。俺も、こんなにドキドキしてる」

先輩が、自分の胸に僕の頭を押しあてた。

僕と同じ位、早く脈打つ鼓動に、胸がいっぱいになった。

下から、先輩を見上げると、再び先輩の顔が、僕に近づき、その唇が僕の唇を捕えた。

そのまま、身体を横たえると、先輩の温もりに包まれて、いつの間にか深い眠りに落ちていた。

恋におちる確率（100%）

最終回の撮影も、無事に終了した。

やっと、砂埃のコーンスターチで、肌や唇が荒れないと思うと、ほっとした。

殺人的スケジュールで、仕事をこなし、僕は毎日死にそうにくたびれていた。

それでも楽しくて、それはなんら苦にならなかった。

先輩の愛を、確かめられたから。

そしてまさか、あんな風に再会が出来るなんて、夢にも思っていなかった。

それは、写真撮影で訪れたパリ。

いつか、行ってみたいと、憧れていたこの場所が、次の撮影場所に選ばれたと聞いた時、天にも昇る心地がした。

アパートメントを、貸切で使い、一人暮らしをイメージしたフォトグラフを、何カットも撮影した。

外に出て、パリジャン達が群れて、ワインを呑んでいる所で、撮影していると、向うから声を掛けて来た。

カメラマンが、流暢にフランス語で、話しをすると飛び入りで、撮影に協力してくれた。

その後、ワインを振る舞われ、すっかり馴染んでしまった。

ますますパリが、大好きになった。

自由な時間が結構あって、マネージャーとブラブラとショッピングしていると、明らかに日本のロケ隊が、何かの撮影をしている所に遭遇した。

「何かの映画みたいだな」

マネージャーが、呟いた。

「あれ、福永さんのマネさん？」

「ホントだ」

そこに、マネージャーがいると言う事は、もしかして・・・

僕の心臓の鼓動が、早くなった。

まるで、新婚旅行みたいだなんて、とんでもない考えが、頭をよぎった。

手を上げて、笑いながら、ゆっくりと近づいて来る先輩に、僕は、運命を感じていた。

The End